

本書は先述した様に既作論考を、大體日附順に編成されたものであるが、概略次の三部に分つ事が出来ると思ふ。即ち「天壤と與に窮りなく永久に生成發展して止るところのない皇道に即し、我が鞏國の國體觀を體しつゝ」、「天業恢弘の大業に翼賛し奉るべく、政治の大局に指針を供與する」のが日本地政學の目的、使命であり、それを達成、完遂する方法は「歴史と地理、地理と歴史の一體的研究」「換言すれば時空一如、空時一如の研究」にあり、而も「斯かる地理と歴史の一如的研究は」「最早從來の意味に於ける單なる」歴史や地理の研究でなく、「それは實に歴史と地理、地理と歴史なる全く新たな學の研究、一の高次の學の研究である」と日本地政學の本質、課題等を烈々たる信念を以て、感激ある言葉で強調せられる第四章迄を第一部とすれば、此の使命、方法論の上に立つて世界の各地域を對象として取扱はれた第十八章迄は第二部である。地域は東北はアラスカより、西南は南阿に及び、「常に皇國日本最重要の問題にのみぶつかつて行く」日本地政學はよく各地域に於ける白人に依る侵略、歪曲を指摘し、皇國日本の進路を明々と指示して餘す所がない。最後の二章は世界の根軸日本の科學的基礎付を文化的、民族的、自然的に示されたもので、云はれ、第三部をなすと見る事が出来る。既作論考の集成とは云へ、全篇愛國の志に燃え、又世界の盟主、世界新秩序建設の指導者として、皇軍の示した雄渾なる大戰略そのまゝに、否大作戰に容與するかの如く、堂々と獨自の分野を開拓されたものであり、一般地政學關係者は勿論廣く江湖の一讀をすゝめる次第である。

る。(十七年十月 大日本雄辯會談社發行 定價貳圓) (岡本信太郎)

土耳其、シリア、パレスチナ
トランス・ヨルダン (世界地
理政治大系)

野間 三 郎 著

對米英宣戰の大詔濺發せられて一周年、その記念日の感激も未だ生々しい。十二月八日といふ日はなんとといふ偉大なる日であつたことであらう。それは併しながらハワイにマレイに或は又フィリピンに米英膺懲の鐵槌が天降つたからのみではない筈である。それは國の内外に互る大きな轉回面の開け行く軸となつた。この日を境として我が國人の物の考へ方が、日本觀、世界觀が違しく飛躍を遂げたからである。人々は新しい衣に裝を改めた。それは眞に喜ばしい涙ぐましい姿であると言はなければならぬ。併しながら、その足場の高さにはなほ甚しい懸隔があり、見定めようと努力しながらもその視線の方向は區々で動搖さへも免れてゐない。われわれは今日も尚ほ一層言ふべき多くの言葉を有ち、呼びかけるべき自己の使命を感ずるといふならば、それは眞しみを忘れた言辭として非難せられることであらうか。併しながら、少くとも世界各地域を如何に把握すべきかを顯示することは我等地理學徒の前に提起せられた課題であると言ふべきである。

茲には從來の所謂「近東」が「アジア西部」として取上げられてゐる。それは勿論單なる言葉の綾ではなく根本的な立場の轉換を物語るものであり、著者は祖國の大地を兩足に確り踏まへて立つて居る。土耳其は西進する東方の先驅者として膨脹收縮するものと考へられ、今や共和國の成立と覺醒を轉機として東洋への復歸を準備しながら、再び東方より來る新しき使命の受理を俟つものとして把握される。シリア、パレスチナ、トランス・ヨルダンの地は本來一體たるべきものであるにも拘はらず、それは英佛の委任統治下に三分せられて、拙劣な分割支配政策の跡を白日のもとに曝け出してゐる。謂はゞ陸橋ともみらるべきこの地帯は、アジア、ヨーロッパ及びアフリカのあらゆるもの、通過して行くところとして描かれるのではなく、寧ろそれ故にこそヨーロッパとアフリカを同時にその内に包含しつゝ、然もアジアとして横たはる綜合地帯として描かれてゐる。

我々はこゝに幾多の地政學的問題の洵爛たる繪卷物をこそ見るであらう。著者の志は百科全書之如く所在の頁を繰つて日常會話の便に供せしめんとするところにはない。全編を貫くもの、體持をこそ念願するのであらう。含みの多い著者の風格ある筆致は時あつて不用意な讀者の視線を惑はせるかも知れないが、美事な解明と摘挾とは惜氣もなく全卷に互つて繰展げられてゐる。

西歐諸國の就中英國の貪婪な眼がこの西アジアに向けられて以來、農業に工業に或は交通政策に於てトルコの被つた慘害の跡をみるがよい。これと略々時期を等しくして始まつた所謂「科學的」

「純粹學術的」探檢に於て、その觀察記述の精緻はもとより認めるとしても、その政治的色彩の後退がこれを「科學的」と呼ばしめたとすれば、それは從來必死の刃を以て立向はねばならなかつた西歐の東洋諸國に對する態度に現れた餘裕に外ならないのではあるまいか。氣候の乾燥化による文化の凋落を説得しようとする氣候變化説は、アジア荒廢の責任を轉嫁しアジアの良心を慰撫し、更にはまた輝かしかるべき前途に注ぐ視力を奪はんとする麻醉劑ではあるまいかといふ著者の試煉に堪へ得るであらうか。

汎イスラミズムと汎ツラニズムとは西歐に蝕まれたその姿を隠し切れなかつた。君府海峡問題を含む所謂東方問題が、自ら獨り太平洋國家たらんと志した英國に於て、特に論ぜられ解釋せられ喧傳さへせられねばならなかつた理由を嘗て誰が指摘し得たであらうか。パレスチナに於けるアラビア人と猶太人との不和鬭争として喧傳せられるパレスチナ問題とは、實は民族主義的運動としての根柢に立ちながらも英國の「濠約」をとがめる騒擾としてあるアラビア問題の隠蔽を企圖するたためのものであつた。英國の地政學的急所はかくて剩すところもなく銳利なメスに切開かれて行く。

最後に著者は、西亜の姿を統一的综合的性格に於て捉へるときに始めて新しき世界の確立に導き得ることを再び強調する。それは久しい間埋没され終つてゐた東亜と西亜との關聯を恢復することによつてのみ成就せられ得るのであると言ふ。本書を讀了して一人でも多くの人に是非味讀を奨めたいといふ氣持の湧起るのを禁じ得なかつた。(A五版二六八頁 昭和十七年十一月 白揚社)

刊 定價貳圓五拾錢) (三上正利)

印度(世界地理政治大系)

淺井得一著

印度は支那と共に古くより我國と密接な交渉を保つて來た。だからその名前を聞くときに起るのは遠い異國の念ではなく、結合の親しみである。日本の國の外にあるのにはちがひないが、決して外國なる語を以て此を律し得ない所以である。

かくて支那に關して支那學がある様に、我國に於いて印度學が成立してゐないのは寧ろ怪しむべきことぞと思はれる。或は印度學は成立してゐぬなど云ふ騒ぎでないと言はれるのかも知れないが、よし存したところでそれも佛敎學の片蔭に息をこらしてゐたまゝ、一般社會の人々にまでは姿を見せようとしなかつたことも確である様に思へる。

又その反面印度に關する、殊に近代以降の印度に關する一類の著述が多く存する。殊に大東亞戰爭以後輩出したこれ等の書物は何と名付けたらよいのか、政治に關し、經濟に關し、或は歴史又は地理に係はるのではあるが、確固たる目標と方法を缺いてゐることに於て雜著と呼ぶべきものであらう。これは少し酷評であるかも知れない。

いづれにせよ、我々の印度に對する關心がもし上述の様な二つのもの以外に求めるべき據所がないとすれば、この大いなる責務

を負ふ我等の時代にとつて甚だ寒心すべきことであらう。何故ならそれ等はいづれも今日の時代と、それを生出す我祖國についての充分なる反省と理解をその方法と目標の内に示してゐないからである。

だから亦、新しい印度に關する學問が興り得る地盤と方向もそこにのみあり得る。印度に關する上述の二種の學もこゝに於て始めて新なる呼吸を始め或は又その模索は光明を仰いで相倚つて印度の解明に進むを得るであらう。

淺井氏著「印度」はまさにかくの如きものとして、日本に於る印度研究の再出發に出走を命じたものと云へるだらう。こゝに於て印度と印度人がその歴史のそれ／＼の時代に於て、又東亞或は世界に於て占める意味が、少くともその輪廓に於て明瞭に捉へ示されてゐる。輪廓とは云つたが、印度理解へのかゝる手掛りはまさ

に大いなる賞讃に價するであらう。
前編、印度の地政學的基礎、中編印度の地政學的要點、後編、印度の屈辱とそのアジアへの復歸と分たれたこの書は、一般讀者といふ對稱に見事に焦準を合せ、平明な記述と俟つて樂々と通讀せしめる。しかしかくの如くして生ずる安易さのうちに、この書の大いなる意義とこの著者の尚志を見失ふことは許されてはならぬであらう。蕪辭をつらねて江湖にその刊行を告げる所以である。(A五版二八一頁 昭和十七年七月 白揚社刊 定價貳圓)

(野間三郎)